

5 小出郷文化会館

広域アウトリーチからまちづくりへ

*1:小出郷広域事務組合は、小出町、堀之内町、湯之谷村、広神村、守門村、入広瀬村の6町村からなる事務組合で、広域の人口は約4万6千人。

1. ホールの概要

- 開館年: 1996年
運営母体: 小出郷広域事務組合(*1)
都市人口: 1万4千人(小出町)
- 施設全体の延床面積: 6,366㎡
- 大ホール(ふきんとホール): 1,136席
小ホール(ゆきんこホール): 406席
リハーサル室・練習室: 3室/約115㎡
- 開館時間: 9:00～22:00
休館日: 月曜、年末年始
- 運営スタッフ総数: 9名
(非常勤含)
企画系スタッフ数: 5名
芸術普及担当者: 兼務
(企画系スタッフ数、芸術普及担当者数は内数)
- 所在地・連絡先:
〒946-0023 新潟県北魚沼郡小出町大字干溝
1848-1(奥只見レクリエーション都市公園小出地域内)
tel. 02579-5-8811
fax. 02579-2-6776
URL: <http://www2.uonuma.ne.jp/~koide-go/bunka/bunka.html>

2. ホールの特色、事業概要

- ホールのコンセプトは、いきいきとした子どもたちの感性を磨く、地域における芸術文化の核施設として機能する、さまざまな地域の交流を行う、世代を超えた環境づくり、の4つを柱とし、地域にとって最適なホールづくりを目指した事業を具体化している。
- 自主事業数: 23本(1999年度)
- 主な自主事業(1999年度、後述の芸術普及活動を除く)

- お楽しみプログラム
- 「企画公募 あなたの夢ください」(2001年度実施予定)
- 「小出郷ユーラシアフェスティバル」(事業委託)

- ホール稼働率: 大ホール: 77.1%
小ホール: 68.7%
- 自主事業予算: 6,108万円
芸術普及予算: 1,980万円
(上記自主事業予算の内数)

3. 芸術普及活動導入の背景、経緯

◎ ホール設立の経緯

- 小出町では、1980年代後半から若者主体による文化ホールの建設を訴える野外コンサートが開催されていた。89年には「まちづくり研究会」が発足、研究テーマとして文化を中心とするまちづくりが取り上げられ、文化ホールの視察やパネルディスカッションが繰り返されてきた。
 - 91年、新潟県の広域まちづくり事業補助金を受け、ホール建設が決定したが、行政側の建設説明会で、今までの住民運動や研究会での意見を取り入れる姿勢のないことに住民が怒りをぶつけた。
 - その結果、このホール建設の任意研究会「文化を育む会」が発足、地域の文化団体の代表50人と行政担当者がメンバーとなり、コンセプトづくりや建築計画の見直しが行われた。この「文化を育む会」メンバーは開館後も運営の核となっている。
- #### ◎ ホールの運営と芸術普及活動との関わり
- こうしたホール建設の経緯から、小出郷文化会館は、すべて住民主体で運営されており、ホールで実施する事業もすべて4つのコンセプトに基づいて企画、実行される。



「リコーダーセミナー」練習風景



左:初級者クラス
右:経験者クラス

- 館長の桜井俊幸氏は、大工出身で、現在も地元工務店の専務を務めており、地域住民の推薦を受けて就任した。
- 年間の主催事業を決める「企画運営委員会」、照明や音響を担当する「ステージスタッフ」、財源不足を補う住民のメセナ団体「サポーターズクラブ」、ホールの主催事業を住民自ら企画・運営する「住民プロデューサー」、会報誌の発行や事業協力を行う「友の会」といったホールの運営に関わる住民の応援組織も、「文化を育む会」の検討の中でつくられた。
- 芸術普及活動は、4つのコンセプトのうち最も重要な柱である「いきいきとした子どもたちの感性を磨く」場の実現を目指した、ホールの生命そのものと言える活動。
- ホール建設以前から、言わば「アウト」のみの状態で長年育まれてきた土壌が、ホールができた今でも、アウトリーチ主体の方針を支えている。

4. 芸術普及活動の内容と運営

◎ 芸術普及活動の構成と内容

- 小出郷文化会館では、育成型プログラムとして、「劇団育成」(演劇集団「魚沼一座」)、「魚沼太鼓セミナー」(鼓童協力)、「バンドやろうや」(上々颱風協力)、保育園での「リトミック・セミナー」(昭和音楽大学提携)、「ステージスタッフセミナー」といった事業を行っている。
- 特に音楽部門では、アウトリーチを含めた以下の育成型プログラムを毎年継続的に実施。
 - 「吉澤実 リコーダー・セミナー」*表参照
 - 「吹奏楽ティーチング&クリニック」*表参照
 - 「小出郷コーラスセミナー」:昭和音楽大学提携、県内外から広く参加者を集め、コーラス指導を実施。
- 「羽田健太郎 ヤング・ピープル・コンサート」*表参照
- 「ピアノ公開レッスン&コンサート」: R.マイスター氏(マンハイム州立音楽大学学長)を招いて、マスタークラスのレッスン、公開レクチャー、演奏会を行う合宿プログラム。

◎ アウトリーチ活動

- アウトリーチは、小出郷広域事務組合の6町村すべてにホールの活動を届け、ホールに対する理解と予算を得るための効果的な事業である。
- 本年(2000年9月)、「『3つのふ』プロジェクト~ふれる、ふるえる、ふえる」((財)地域創造助成事業)で、バイオリン、フルート、ハープ、ピアノ、声楽の計7人のクラシック音楽若手アーティストの協力を得て、4つのアウトリーチコンサート(城山トンネルコンサート、ハープ IN 宮終二記念館、ピアノ IN 神湯温泉倶楽部、守門村議会議場声楽コンサート)を行った。
- 第一弾で、2000年秋に開通予定の国道291号城山トンネルで「バイオリンとフルートの夕べ IN 城山トンネル」(新潟県小千谷土木事務所の協力)を開催。トンネルという特殊な会場を選んだことで、演奏会に来たことのない住民も興味を持って来てくれた。こういったファンができたことは、今までの活動の積み重ね。
- 9月に守門村議会議場で行った声楽コンサートの開催にあたっては、ホールのコンセプトの理解と共有を促進するため、事前に、村長をはじめ、教育委員会、議員、議会事務局との合意形成を行った。説明には非常に手間がかかるが、その分、いろいろな人に直接関わってもらえることができるので、成功したときにはお互いに理解が深まる。人がいるところに行けばよいという発想がアウトリーチ。
- 本年度からは、高齢者施設などの福祉施設での事業も実施している。

◎ 主な芸術普及事業の概要

事業の名称(開始年度)	事業の内容(実績は1999年度)、課題や今後の展望				
羽田健太郎 ヤング・ピープル・コンサートおよびプレコンサート (1996年度)	<p>羽田健太郎氏の共同企画によるプログラム。毎回テーマを決めて音楽の喜びを子どもたちに伝えることが目的。2日間の日程で、うち一日は小出郷の小学5年生を招待する。</p> <p>2000年度は、「映画音楽って何?」と題して、楽しいおしゃべりを含んだコンサートを実施。</p> <p>プレコンサートとして、新星日本交響楽団のメンバー(バイオリンとトロンボーン)による学校訪問コンサートを実施して、演奏会への動機づけを行ったところ、非常に効果があった。今後、どういった方法で小学生へのアプローチを継続的に積み上げていくかが課題。</p>				
	対象	参加者数	実施頻度	参加料	予算規模
	一般市民(プレコンサート:小学校)	延べ1,900名	年1回	¥3,000~4,000 (小学生は無料)	1.298万円
吹奏楽ティーチング&クリニック (1996年度)	<p>「小出郷管楽アンサンブル」事業:ホールが中越地域に住む社会人の音楽愛好家に声をかけて「小出郷管楽アンサンブル」を結成。ホール・レジデントのアンサンブルとして、「音楽の夕べ」、「吹奏楽フェスティバル」といったホールプログラムにも出演する。団員は26名、練習は月1回。今後、自主運営と地域への浸透が課題。</p> <p>「小出郷ジュニア・プラス・オーケストラ」事業:小出郷広域の小学4年生~高校生までなら誰でも参加可能。「小出郷管楽アンサンブル」のメンバー等が指導、育成にあたっている。参加者は地域の小・中・高校生約35名、毎週土曜日午後7時から練習に励む。指導体制の強化と保護者会の充実、練習内容の充実、楽器不足、待機者への対応が課題。</p> <p>「クリニック」:東京佼成ウインドオーケストラから講師を招いての楽器別管楽器講座。(聴講も含め、県内外から延べ132名が参加)</p>				
	対象	参加者数	実施頻度	参加料	予算規模
	一般市民	525名 (セミナー参加者)	年8回	¥1,000	72万円
リコーダー・セミナー (1996年度)	<p>リコーダー奏者・吉澤実氏を講師に招いてのリコーダーのレッスン。中・上級者向けの「エンジョイコース」、初級者向けの「ビギナーコース」に分かれてレッスンする。県内の小学校3年生から熟年まで参加。</p> <p>毎年12月にセミナー参加者全員による演奏会のほか、講師の吉澤氏出演の演奏会を開催している。</p> <p>継続者が多いことに加え、子ども会員が増加し、世代を超えて一つの音楽を作るという目的が達成されつつある。</p> <p>今後、受講者のレベルに応じたコース設定、組織化と自主運営が課題。</p>				
	対象	参加者数	実施頻度	参加料	予算規模
	一般市民	70名	月2~3回程度	¥10,000(社会人) ¥6,000(高校生以下)	196万円

*2: 吉澤実氏のコメントから:

- 小出郷文化会館は、常に何かを生み出し、生活の中に根づかせるという役割を担っており、地元還元している。これは、文化会館だからできることである。
- 教育(education)とは、内にあるものを引っ張り上げるという意味から派生した言葉。
- 自分にとって小出郷とは「人」。人という字は、人と人が高まりあうことを示したもの。「生きること」は「創造すること」であり、音楽家にとって、演奏と教育は同じ行為である。「音は人になり、人は音になる」。この言葉を今後の座右の銘にして、活動を展開していきたい。

◎ 学校との連携について

- 2002年に学校の指導要領が変わることは、ホールにとっては大きなチャンス。ホールが学校教育の枠に収まらない部分の受け皿をつくれれば、指導要領に縛られない自由な芸術教育が可能になる。
- 学校でアウトリーチを行う場合、ホール側が企画したプログラムを持ち込む形で、とくに先生方と事前打合せは行っていない。
- 学校とホールのやり方には、まだまだギャップもあるが、ワークショップで子どもが目を輝かせるのを見て、学校の先生方も事業への理解がかわる。今後ステップアップの方法として、事前打合せを行うことも検討したい。
- PTA との関わり方も、今後のアウトリーチの方向性や広がりを見ると可能性がある。親子層でファンを増やすこともできるだろう。

◎ アーティストとの連携

- これらのアウトリーチプログラムを新たに企画する際には、第1回の音楽活性化事業の登録アーティストを中心に依頼している。
- ワークショップやコンサートはほとんどが継続事業であり、2年目以降も同じアーティストに依頼することで、アーティストとの連携ができてきた。
- 例えば先日も、小学校と病院から、それぞれ別々にアウトリーチプログラムの申し込みがあった。予算の問題から実現は厳しいと思われたが、この2つの日程をリコーダーワークショップの日程とあわせることができればと、講師の吉澤実氏(*2)にお願いしたところ、快く承知して頂き、小学校と病院の両方でリコーダーのアウトリーチプログラムを実施することができた。
- こういったアーティストの暖かい気持ちは市民にも伝わるし、ホール側もアーティストの想いに応えるため、ミッションを持って事業を実施していかなければならない。

- アーティストの卵を支援するのもホールの事業を企画するにあたっての楽しみ。練習の場を提供したり、合宿の場を提供するなど、長期的な視点での支援が必要。

5. 芸術普及活動の効果、今後の課題と展望

◎ 芸術普及活動の実施に伴う効果

- アウトリーチ活動で、今までにコンサートに来なかった人や、県の小千谷土木事務所といった町の公的機関や行政内にも音楽ファンができてきた。今までの活動の積み重ねが実ってきたことを実感する。
- アウトリーチの事業予算は年々増えており、これは、広域圏の町村長からの質問への回答や学校訪問をはじめとするアウトリーチの拡大の成果。
- 5年間文化庁から受けてきた助成が今年度で終了するが、住民から事業を継続してほしいという要望が強く、また、企画運営委員会の中でもアウトリーチ活動は評価されている。
- こうした活動の成果は、今後の町村合併の潤滑油にもなるもので、芸術普及活動は小出郷のまちづくりの核となっている。
- アーティストとのよりよい関係づくりで、ホールが地域の情報センターとしての役割も担えるようになってきた。これも5年間の芸術普及活動の成果

◎ 課題と今後の展望

- 現在4万6千人の小出郷広域地域の人口は、30年後には3万人に減少すると推計されており、その時にも、小出郷文化会館が地域の欠くべからざる施設として存在するためのキーワードは小学生。
- 30年後に、今小学生の子どもたちが自分の子どもを連れてホールに来てくれるような環境づくり

を行っていかなければ、ホールの未来はない。
そのためにも、芸術普及活動は大きな役割を担う。

- 地域に基盤を置く公立施設は、その地域の中で「ゆりかご」として機能すべき。小さな地域に存在すればするほど、日常的に地域の大人や子どもが足しげく公立施設に通うしくみが必要。
- 住民に芸術文化を普及していくためには、音楽をただ聴かせるだけでなく、本当にリラックスして聴ける環境づくり、そして音楽が好きになれる環境づくりをしていくことが必要。
- ホールのコンセプトに基づいたプログラム構成を心がけてきた結果、知らないうちに幅広い年齢層が芸術文化を学べる環境ができてきた。今後、リコーダー、吹奏楽、演劇などさまざまな分野で、年代を超えた人々が参加できる「自由大衆構想」を立ち上げる予定。